

上海気まぐれ日記「上海音楽学院とその周辺」 2

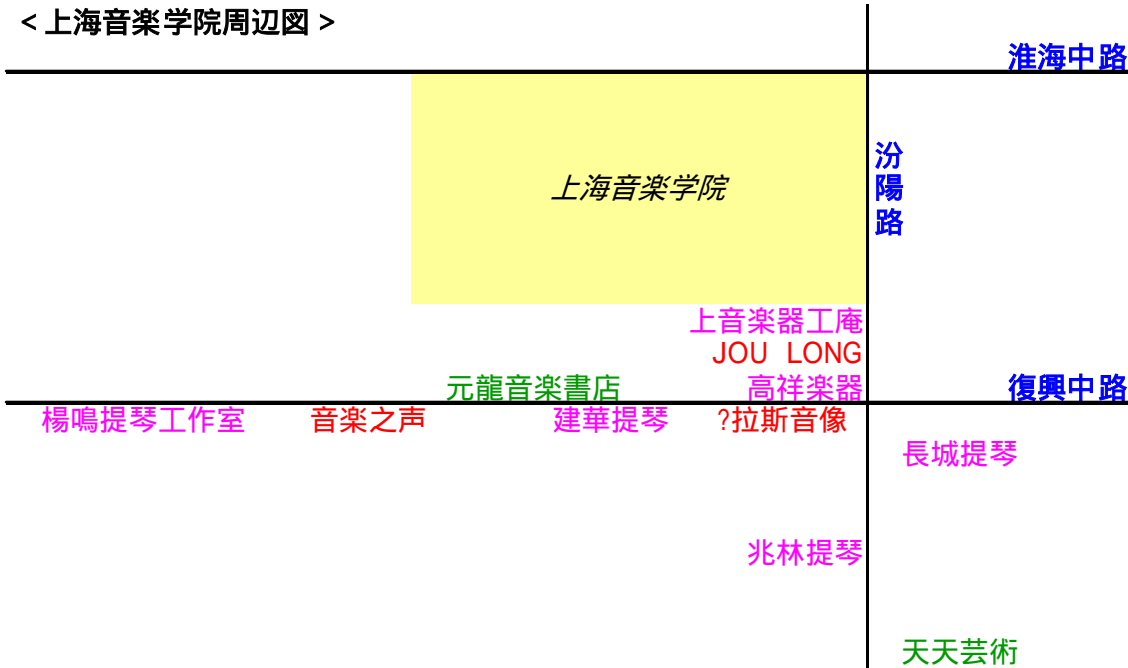
08.6.22

上井 真

今回は、上海音楽学院周辺の様子を書いてみます。

上海音楽学院の周辺には、楽譜屋（緑字）、CD屋（赤字）、楽器屋（ピンク）が並んでいます。この界隈は旧フランス租界エリアでもあるので、独特の雰囲気をもった街並みになっています。

< 上海音楽学院周辺図 >



< 楽譜屋 >

天天芸術



元龍音楽書店



天天芸術は、楽譜・CDなどのチェーン店で、ヤマハにちょっと近い存在でしょうか。私の見た範囲で、恐らく上海で最も楽譜の種類が置いてあるところですよ。上海音楽学院の近くなので、基本的には、独奏楽器の楽譜が多いのですが、スコアや音楽関連書籍もまあ揃っています。

中提琴（ビオラ）の楽譜を見てみると、いろいろ面白いことがわかります。中国では楽器検定制度があ

り、バイオリンの場合、1-10級+演奏級に段階が分かれています。バイオリンの場合、一般にバイオリンをやってから転向することが大半なため、上海音楽学院の試験曲集は、8-10級+演奏級を対象にしています。(*)

入っている曲集の一例ですが、8級は、campagnoli とテレマンの協奏曲、9級が campagnoli とホフマイスターの協奏曲、10級が campagnoli とシュターミッツの協奏曲、演奏級が campagnoli とウォルトンの協奏曲といった感じです。この試験曲集は、「中提狂」の演奏会に出ていた2人の演奏者と教授によって編集されており、このことから、この人たちが、上海バイオリン界を引っ張っているような事が伺えます。買ってみたいので、ちょっと時間のあるときにでも、練習してみようかと思えます。

その他に、北京の中央音楽学院の補助教材としてバイオリン独奏曲がいろいろ出版されていますが、試しに持っていないレーガールの無伴奏バイオリンソナタを買ってみました。価格は18元なので、日本円に換算して252円です。安いですね。

楽譜は全般に激安で、オイレンブルグのスコアが中国語で解説が書いてある以外はそっくりなものが、湖南文芸出版社というところから出されており、ベートーベンの弦楽四重奏曲 op127 の場合、7元(約98円)でした。既に著作権は50年で切れるから問題ないってことなんでしょうか？

元龍音楽書店は、ピアノ独奏楽譜のたくさん置いてあるお店でした。

(*) 中国は、楽器愛好者？が増えたというか、楽器学習熱がすごく、バイオリン、ピアノを習う子供が急速に増えています。理由は大学入試の採点で一芸に秀でていると加点の対象となるというもので、先ほどの楽器検定がその際の客観的評価に使われているそうです。

こうした状況であるので、数少ないアマチュアオーケストラである上海城市交響楽団などでは、弦楽器団員数の充実ぶりには目を見張る一方、アンサンブル面では、他人の音楽を聴いて合わせるのには苦手。信号待ちをしていた大量の自転車集団が、信号が青になると同時に思い思いにこぎはじめる姿に似ている感じを受けます。個人の能力の成長という点では、著しい高度成長を遂げていますが、音楽をいろいろな角度で楽しむことに関しては、まだまだこれからといった感じです。

< C D、 D V D >

JIU LONG



カラス音像

音楽の声



次はC D屋です。

JIO LONG は上海音楽学院の正門の並びにあり、C D、D V Dの品数は上海の中では多い方です。輸入音楽雑誌もかなり置いてあります。中国語でクラシック専門雑誌も発刊されており、クラシックファン層が少しずつ拡大していることを伺わせます。

4 拉斯音像はポピュラー洋楽全般が得意分野。

5 音楽の声はクラシックのC D、D V Dがそこそこ置いてあります。上海の近代優秀歴史建築の一角にあります。

どのお店も、作曲家の名前順とかジャンル順とかあまりきれいに分けていないので、端から端まで探していかないと自分の探しているものを見つけることができません。結構根性いるんですね。

また、全般に品数は日本とは比べられないので、どうしても欲しければ、H M V日本にネットで注文するしかありません。

< 弦楽器制作 >

楊鳴提琴工作室



長城提琴

建華提琴



兆林提琴



この界限には弦楽器工房がかなりあると聞いて、ふらふら見に行きました。最初に入ったのが、楊鳴提琴工作室。変な日本人が入ってきて、ビオラを見たいというものだから、主人も始めはちょっと戸惑い気味でした。でも、借りて弾き始めると、だんだんこいつやるじゃねーかーという感じに変わってきて、結構歓迎してくれました。1月月初に行ったので、2月足らずしか中国語を勉強していない頃で、もう少し話せたら面白かったところです。

次に 建華提琴に入りました。この界限では、一番高級そうな店構えでした。外見では分かりませんが、内装の家具や楽器ショーケースへのお金の掛け方は、他とはグレードが違いました。ここは、中国生産の楽器を売るだけでなく、輸入楽器も手広く扱っているようでした。とりあえず、ここで生産している楽器を弾かせてもらいました。以前、90年代の中国製ビオラの印象は、ならない見本展示品といった感じがありましたが、今回弾かせてもらったものは、表板全般からしっかり音が出てきていて、かなり表現の幅も広い印象を受けました。ただ、裏板までしっかり鳴っているものは、年月とともに変わってくるのか、弾いた範囲では、出会わなかったです。

最後に入ったのが、兆林提琴でした。ここでは、出来立てほやほやのビオラを弾かせてもらいました。そのせいか、C線の調弦をしても、すぐに弦が緩んでしまい、なかなか固定できませんでした。若い2代目が、無理やりぎゅーっと押しこむとあら不思議、一応弾けるようになりました。でも、そこそこバランスよく鳴っていて悪くはありませんでした。

青木バイオリン教室の青木先生によれば、北京の楽器工房の傾向は、楽器をとにかく鳴らす音作りで、キンキンした音色になりがちとのこと。上海の楽器工房は、全体にバランスのとれた楽器作りを指向する傾向にあるようで、楽器の音作りにも、地域差があるようです。

< 楽器販売 >

上音楽器工廠



高祥楽器



上記のような個人製作者のお店以外に、日本でいうと、ヤマハみたいな楽器量販店みたいなところもあります。上音楽器工廠、高祥楽器がこれに該当します。

ここで販売されている楽器の相当数は、上海の北隣の省、江蘇省にある涇橋鎮というところで生産されているものが、大半とのこと。涇橋鎮はバイオリンの里として、2008年の3月に読売新聞の記事に取り上げられ、各種ブログでもこの記事の内容を紹介してありましたので、拾い集めてみました。

< 中国 バイオリンの里 >



江蘇省の涇橋鎮は、世界のバイオリンの約半分を生産し、「バイオリンの里」と呼ばれています。

涇橋鎮は人口3万人の田舎町ですが、約50のバイオリン製造会社がひしめいています。

かつて目立った産業も無い町でしたが、文化革命中の68年、上海のバイオリンメーカーを解雇された2

人の職人が里帰りし、バイオリンの部品を作り始めたのを機に、90年代から同業者の設立が相次ぎ中国屈指の楽器製造の中心になりました。

16世紀に誕生したバイオリンは、大正時代には日本が世界市場を独占しましたが、20年程前から中国製が世界市場を席巻するようになりました。

今も高級品はイタリア等の職人技が愛されていますが、中国製の品質も急速に向上したと言われています。

地元政府は町を製造だけでなく音楽芸術の中心にも育てたいとし、小中学校などで住民向けのバイオリン教室を支援しています。

中国では経済成長による富裕層増加で、バイオリンを習う子、若手バイオリニストも台頭し始め、そんなバイオリン熱を背景に父子の愛情を描いた映画「北京バイオリン」は日本でも話題になりました。

写真上はバイオリン仕上げ工程の作業員、下はバイオリンを弾く子供達。

<http://geocities.yahoo.co.jp/gl/riichirokita/view/200803>

作成者北川 理一郎 (Bei Chuan li yi lang)

< 中国バイオリンの里 >

農村地帯で行く手にひょっこり現れた小さな町は音楽工場が立ち並び、校舎から子供たちが奏でるバイオリンの音色が響いている。

中国江蘇省の涇橋鎮は、世界で流通するバイオリンの約半分を生産し「バイオリンの里」と呼ばれる。なぜここでバイオリン産業が盛んになったのか。

涇橋鎮は人口3万人あまりの典型的な田舎町だが、楽器工場や楽器販売店の看板がいたるところに掲げられているのが他の町と異なる。バイオリン製造会社が約50社もひしめく。世界最大の生産量を誇る泰興鳳靈楽器有限公がある。



新華社通信によると、中国の年間バイオリン生産量は約70万本で世界の総生産量100万本の7割を占める。涇橋鎮全体で約50万本。泰興鳳靈楽器有限公司では作業員1280人が年に約30万本を生産、ざっと世界に出回る3本に1本の割だ。卸値で約3000円の量産品から数十万円する物まで品揃えは多彩。大半が輸出され、海外からの委託生産もしている。

かつて町には目だった産業もなく、やせた農地が広がるだけだった。文化大革命のまっただ中の68年、上海のバイオリンメーカーを解雇された2人の職人が里帰り。農地も職もなく、仕方なくバイオリンの部品を作って上海に出荷し始めた。

その50人足らずの工場に71年手に職をつけるため高校卒業後働きはじめた李氏。80年に工場長、83年に社長に昇格。上海のメーカーと提携し、そのブランドや販路をフル活用して生産をのばした。米国の楽器専門商社の目にとまり、いち早く輸出に乗り出し急成長。96年には製造から販売までを手がける総合メーカーとして自立、自社ブランドによる販売を始めた。今ではエレキギターなども手がけ、売り上げは焼く2億元（約30億円）に上る。

田舎ならではの利点もある。大都市より人件費が圧倒的に安い。住民の大半が楽器産業にかかわり、親子2代、3代にわたって楽器作りのノウハウが伝わる。他に産業がないため工員の8割が地元出身者で定着率が高く、熟練工も多い。こうした条件が低価格、高品質を支えている。

楽器工場近くにある涇橋鎮中心学校の教室の窓から、抗日戦争時代に作られた毛沢東主席をたたえる革命歌を奏でるバイオリンの音色が流れている。教室の中では、3、4年生の生徒約20人がうっとりとした表情で弾いている。この学校にはバイオリンの必修科目があり、週1回90分の授業を続ける。楽器は地元企業が寄贈した。4年生のある生徒は「ママが作ったかもしれない楽器が弾けるなんて楽しい。ママはいつも私に弾くようにせがむの」と笑った。

地元報道によると、同地を訪れた米国人のバイオリン商が「バイオリンの里なのに音色が聞こえない。皆さんは自分たちの産品を信じてないの？」と笑ったと言う。地元政府は早速、バイオリン教師を招き、企業や小中学校等で住民向け教室を開設した。

バイオリン産業は輸出が主だが、経済成長による富裕層増加で、内需も拡大している。上海音楽家協会バイオリン専門委員によると、上海の愛好者は5万人以上で、検定試験の受験者は年間約5千人。制度が始まった87年の約25倍にもなった。大学入試には一芸に秀でた生徒に加点する制度があり、受験のためにバイオリンを子供に習わせる親も多い。

上海出身の黄蒙拉さんは02年、世界的権威があるイタリアのパガニーニ国際コンクールで金賞に輝いた。11歳で欧米の国際コンクールを制し「天才少年」と言われた李伝韻さんも世界で活躍している。いずれも20代だ。

<http://blog.explore.ne.jp/music/index.php>

上海 ミュージックアートハウスのHPより

以上